

早大蔵『撫子の』百韻』訳注（一）

付、同百韻調査記録及び翻刻

伊藤伸江・奥田勲

早稲田大学中央図書館伊地知鐵男文庫蔵『集連』内に、細川勝元が発句を詠んだ『撫子の』百韻』が収録されている。この百韻は、張行年次は不明であるが、専順、心敬、行助、宗祇、宗怡ら連歌師が参加し、細川勝元とその家臣たちが張行した百韻で、多くの連衆が『熊野千句』の連衆と重なる。心敬が在京時に密接な関係を結んだ細川右京兆家とその家臣が連衆に入っており、その文化圏と心敬との関わりを考える上で重要な百韻である。それゆえ、伊藤と奥田は、心敬の連歌作品の研究を進めるにあたり、『撫子の』百韻』の表現分析が非常に有用であると判断し、この百韻の注釈作業を共同で行い、発表をなすこととした。従って、この訳注及び翻刻、解説は科研費基盤研究（C）「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）の成果である。注釈等の執筆に関しては、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

【凡例】

一、底本は早大図書館伊地知鐵男文庫蔵『集連』内に存する某年張行の賦初何百韻（『撫子の』百韻』である。該本は、他に伝本を聞かないいわゆる孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。翻字本文は百韻とし

て示してあるので、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記したが、底本は虫損によって、欠字及び判読しがたい部分が若干存するため、本文を推定の上考察した句が存する。

一、各句には、折の表示とその折内の番号、百韻全体の通し番号を頭に示し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】の項目も設けた。

※ 本訳注(一)の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学 説林』掲載の訳注(三)の末尾に掲載する。通覧の際に参照を願うものである。

(初折 表 一)

一 撫子の花の兄かも梅雨

勝元

【式目】夏(梅雨) 「夏の心、梅雨」(連珠合璧集)。 参考「夏の末の心、なでしこ常夏」(連珠合璧集)。 賦物は「初

花」。「初何 …花」(野坂本賦物集、連歌初学抄)。 撫子(植物) 梅雨(降物)

【作者】細川勝元(永享二年(一四三〇)〜文明五年(一四七三))。父は細川持之。文安二年(一四四五)、十六歳で

管領となつてから、以後三度、二十三年間にわたり管領をつとめ、幕府に大きな影響力を持った。山名宗全と応仁の乱で戦う。正徹を和歌の師匠と仰ぎ（『東野州聞書』宝徳二年十一月七日条）、正徹（後に正広）出題の月次歌会を自邸で開催している（『松下集』六〇一詞書）。連歌は、『新撰菟波集』に三句入集。文安年間から毎年北野社奉納の『細川千句』を興行、『熊野千句』に主客として参加。寛正年間の事蹟としては、主催した『寛正四年三月廿七日何船百韻』や、発句を与えた『寛正五年十二月九日何路百韻』、『寛正六年十二月十四日何船百韻』、脇を詠む『寛正四年六月二三日唐何百韻』などの百韻が残る。

【語釈】●撫子 ナデシコ科の多年草で、夏から初秋にかけて淡紅色の花を開く。撫でかわいがる子供の意も含むことから、発句内に親族を表わす点で「子」と縁のある「兄」を入れている。春から秋まで長く咲き続ける性質があり、それにより常夏という異名を持つ。常夏の名の場合は、「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝る床夏の花」（古今集・夏・一六七・凡河内躬恒）の歌から、「床」すなわち恋の印象が強く、「撫子」が「子」の印象を強く持つのとイメージが違つてくる。常夏は藤原定家の詠花鳥和歌において、六月の花とされ、こうした意識から、撫子も連歌においては六月の花とされる。「おほかたの日影にいとふ水無月の空さへをしき常夏の花」（拾遺愚草・詠花鳥和歌・六月常夏・一九八九）。「六月物　：撫子　常夏（初学用捨抄）。「六月渡の発句には、：撫子のおひさきをたのむ体」（梅春抄）。●花の兄 梅のことを言う。「花の兄と申は、梅の異名也。初春也。発句□花の兄とすべし。」（梵灯庵袖下（西高辻家本）。「それ大方の春の花　木々の盛りは多かれども　花の中にも初めなれば、梅花を花の兄とも言へり。」（謡曲「難波」）。「名もしるしこの神の木の花の兄」（宗砌発句並付抜書・一八〇一）。●梅雨　五月頃に降る長雨。五月雨。「夏の季の詞　：梅の雨」（宗祇袖下）。「梅雨」は、はやく和漢朗詠集の、李嘉祐の漢詩にあり、「梅雨」の訓読から来た語。「千峰の鳥路は梅雨を含めり　五月の蟬の声は麦秋を送る」（和漢朗詠集・蟬・一九三・李嘉祐）。和歌では、「梅雨」題は『秋風和歌集』（ただし「杜梅雨」）、『龜山院御集』に見られるのが早く、『沙玉集』を経て正徹、正広の家集にわずかに見られる。「梅雨」を歌中に詠みこむ歌は、『宝治元年院御歌合』『五月郭公』題に二例見られて以降は、『松下集』

に二例のみで、いずれも陰暦五月の詠（長享三年五月十日詠、延徳二年五月八日詠）。なお、「梅雨」題は正徹も詠んでいるが、歌の語句は「五月雨」を用いている。後の山科言繼の詠草でも、公宴題は「梅雨」ではあるが、歌内の語句は「五月雨」であり（権大納言言繼卿集四六九詠（永禄十一年）、やはり「梅雨」は歌の中では使にくい語句であった。「庭にちる花橘の梅雨に声はしをれぬ時鳥かな」（宝治元年院御歌合・五月郭公・越前・七七）。「わくら葉もともに千しほの梅の雨時雨となりて紅葉しぬらん」（松下集・梅雨・一四二四）。連歌においては、応永期に、奈良県山辺郡の豪族による染田天神連歌内に集中的に見られ、また『九州問答』発句にも例がある。しかし、心敬的な内容を有するとされ、兼載の著作かとも目される（『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）内、『初学用捨抄』解説（木藤才藏氏）による）連歌学書『初学用捨抄』には好まれない言葉であることが記された。漢語をやわらげた俗語として使われ、十五世紀前半の連歌に一時的に流行した語句であったか。「くれなるの花の露こそ梅の雨」（行助句集・夏・一四二八）。「はれにけり花のなき名の梅の雨」（九州問答・安楽寺法楽に）。「五月物 五月雨 梅の雨今の時分好まぬ詞也」（初学用捨抄）。

【現代語訳】撫子の花に梅雨が降りそそいでいる。梅は花の兄というから、さしずめ梅雨も撫子の花を慈しむ兄なのだろうよ。

【考察】この発句の詠出時期については、「撫子」「梅雨」を同時に詠む点、判定が難しい。しかし、「撫子」は夏の終わりになっても咲き続けるのに対し、時期が限定される「梅雨」を詠むことから、「梅雨」を詠み込んだ和歌の用例も傍証として、陰暦五月の発句と認定してよいであろう。

この句は、「常夏」「五月雨」を、「撫子」「梅雨」と言い換えている点、くだけた遊びを感じさせる句であり、これに受けるかが脇句の作者の力量の見せ所である。

(初折 表 二) 撫子の花の兄かも梅雨

二 枝をつらぬる木々の夏陰 専順

【式目】夏(夏陰) 植物(木々)

【作者】専順(応永十八年(二四一一)～文明八年(二四七六))。六角堂柳本坊法眼。当時の都の連歌界の第一人者であり、將軍義政の連歌会に出座している。『新撰菟玖波集』には百十一句入集。いわゆる連歌七賢の一人。

【語釈】●枝をつらぬる 枝をさしかわして並べている。貴人の兄弟のことを「連枝」と言い、親を同じくする兄弟の意味も示す。「兄弟トアラバ、枝をつらぬる」(連珠合璧集)。「いにしへもたぐひもあらじ我が宿に枝をつらぬるかしは木のかげ」(玉葉集・賀・一〇九一・前大納言光頼)。「花に風雨にすむともいかならむ／枝をつらぬる松の藤波」(宗祇以前「きりのはに」何船百韻・六九／七〇)。

●夏陰 夏の物陰の涼しい場所をいう。『了俊日記』には「世俗言」として定家歌(『拾遺愚草員外』三二番歌)が証歌に挙げられている。「一、世俗言、只言をよめる証哥、点合たる只(言)世俗言也；竜田山一葉おち散夏影もおもひそめて色はみへりけり 定家」(『了俊日記』)。すなわち、歌言葉とは認められない言葉であり、連歌における使用例も、『俊頼髓脳』での「夏鹿毛」と掛けた付合など、俳諧的な要素を持つ語句として詠み入れた感がある。「夏影のつま屋の下に衣裁つ我妹 裏設けて 我がため裁たば やや大きに裁て」(万葉集・旋頭歌・一二七八)。「雪ふればあしげに見ゆる生駒山／いつなつかげにならむとすらむ」(俊頼髓脳・重之／かうぶんた)。「鬼籠る安達がおくはさもとほし／しげるまゆみの青き夏かげ」(文安雪千句第四百韻・八一／八二・聖阿／日晟)。

【付合】発句に「兄」とあるのを受け、脇では、「枝をつらぬる」と根を同じくする木の様を詠んだ。細川勝元の一族の繁栄を祝する意を込め、一座の連衆の忠実な結束を見せるか。細川一族は幕府の中核にあり、分家七家が宗家(京兆家)を盛り立てる体制をとっていた。また『ひとりごと』に「永享年中の比までは、歌連歌の名匠先達世に残りて、き

らくしき会席所々に侍しなり。武家には、京兆亭・同典廐亭・同阿波守」とあり、細川一族の各邸で和歌、連歌の会が頻繁に行なわれていたことがわかる。

【一句立】枝をさしかわし繁る木々の下は、夏の暑さをさえぎる陰となっているよ。

【現代語訳】（前句 撫子の花に梅雨がふりそそいでいる。梅は花の兄というから、さしずめ梅雨も撫子の花を慈しむ兄なのだろうよ。） そう思ってみれば、まるで兄弟が育つ様子のように、一つの根から多くの枝をさしかわす木が並ぶその下は、夏の暑さをさえぎる陰となっているよ。（勝元様のお力でご兄弟が繁栄なさっている、その大きな庇護のもとに私たちはいることだ）

（初折 表 三） 枝をつらぬる木々の夏かけ

三 山深み涼しき水に鳥おりて 心敬

【式目】夏（涼しき） 山（山類・体） 水（水辺・用） 鳥（動物） 「夏の末の心、すゞしき（夕すゞみ朝すゞみ）」（連珠合璧集）。 鳥只一春一 水鳥、村鳥等之間一、鳥獸と云て一、狩場鳥、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（一座四句物・新式今案）

【作者】心敬（応永十三年（一四〇六）〜文明七年（一四七五））。細川勝元邸での連歌張行にあたっては、心敬が宗匠としてとりしきっている（『所々返答第二状』）。この百韻においても宗匠として十三句出詠。『新撰菟玖波集』には集中第一位の百二十四句入集。

【語釈】●山深み 奥深い山なので。「山深み岩間を伝ふ水の音に思ひしよりも澄む心かな」（尊円親王五十首・山家・四三）。●涼しき水 心敬は「水ほど感情深く清涼なる物なし」（ひとりごと）と、水を好んだ。「夏は清水のもと、泉の辺、また冷え寒し。」（ひとりごと）。「繁る木ながらみな松の風／山陰は涼しき水の流れにて」（文和千句第一百韻・

二／三・良基／永運)。●鳥おりて 鳥が下りてきて。和歌では、鳥は苔に降りると表現され、水に降りる場合は水鳥と詠まれるようであり、連歌でも水に降りる「鳥」は管見に入らない。「夏ふかき園の植木ぞしづかなる梢の鳥やこけに降るらん」(夫木抄・夏雑・三三〇一・九条基家)。「こてふとびかふ岸の山吹／蛙鳴く春の水田に鳥おりて」(文安月千句第七百韻・六四／六五・日晟／生阿)。「人をも知らぬ世の外の山／なれぬれば袖のこけにも鳥おりて」(芝草内連歌合・一六一)。

【付合】前句の情景を敷衍した句だが、発句、前句が俗語を入れただけの中に細川家の隆盛をひとまとまりで示す感があるところ、宗匠心敬は、うってかわった印象の第三を詠み入れている。前句の植物(木々)に代えて動物(鳥)を入れ、動的な内容に句を変えている。一句の中に山類と水辺を配し、動物を添えるところなどは、本格的に句境を広げて行く第四句で行様の変化を出しやすいうようにとの行き届いた配慮でもある。

【一句立】山が深いゆえ涼しく冷たい水には、鳥が涼を求めて降りてきて。

【現代語訳】(前句 枝をさしかわし繁る木々の下は、夏の暑さをさえぎる陰となっているよ。) 山が深いゆえ涼しく冷たい水には、鳥が涼を求めて降りてきて。

(初折 表 四) 山深み涼しき水に鳥おりて

四 岩間の月にかかる白波 実中

【式目】秋(月)波(水辺・用) 月(夜分)

【作者】実中 摂津国高槻にある臨濟宗景瑞庵の住持。『寛正六年正月十六日何人百韻』の主催者。『新撰菟玖波集』に二句入集しているが、いずれも詠み人知らずとしての扱いである。

【語釈】●岩間の月 岩と岩の間の水面に映る月。「山川のはやくもあくる夏の夜に岩間の月は影もよどまず」(嘉元百

首・夏月・一九二五・二条為藤。「洩る水や岩間の月をたたくらむ／流れ流れにながめある秋」(文明年間「したつゆは」百韻・六七／六八)。**●**かかる白波　かかって見える白波。「大井川さやかにうつる秋の夜の月のこほりにかかる白波」(新千載集・秋上・四三八・二条為世)。「浦深潮未落／松のしづえにかゝるしらなみ」(菟玖波集・貞和五年六月家の和漢聯句に・二〇〇七・左兵衛督直義)。

【付合】鳥が降りる際に立てたしづきが、水面の月にかかるように見えるとした。「池水にむれておりゐる水鳥の羽風に波やたちさわぐらん」(堀河百首・水鳥・一〇二二・肥後)。

【一句立】岩と岩の間の水面に映って見える月には、白い波がかかっている。

【現代語訳】(前句　深山ゆえに涼しく冷たい、その水には鳥が降りてきて) 岩と岩の間の水面に映って見える月に、波しづきがかかる。

(初折　表　五)　岩間の月にかかる白波

五　露払ふ風に夢なき旅枕

通賢

【式目】秋(露)　旅(旅枕)

【作者】通賢　越智氏。『細川満元三十三回忌品経和歌』に詠出。『寛正四年三月廿七日何船百韻』、『寛正四年六月廿三日唐何百韻』、『熊野千句』に参加、『熊野千句』では第八百韻の発句を詠んでいる。

【語釈】**●**露払ふ風　露を吹き払う風。「露払ふ風もてひらく蓮葉は月にたとへぬ扇なりけり」(正治初度百首・夏・二二・三六・中納言得業信広)。「露払ふ草の枕に聞きわびぬこよひかりねの床の山かぜ」(新後拾遺集・羈旅・八八八・法印顯詮)。「齡をも驚く夢に秋ふけて／身の露払ふ風なよはりそ」(下草・雑上・七五九／七六〇)。**●**夢なき　夢もみえず。風で露が落ち、体にかかるその水滴の冷たさに目覚める。「風吹けば露こそ落つれ萩の葉にむすばぬ夢のいかでさ

むらん」(新統古今集・雑上・一七〇〇・前參議通敏)。●旅枕 旅に出て仮寝をすること。「野辺のいほ磯のとまやの旅枕ならはぬ夢はむすぶともなし」(玉葉集・旅・一一九一・山階入道前左大臣)。

【付合】白波が立つ夜分の水辺の情景の前句から、旅泊の様であるとした。白波が立つのは、強い風が吹いているからであり、その風は露をも払い、旅人の夢をさます。

【一句立】露を払って風が吹き、落ちかかる露の冷たさに夢見ることできない、旅の仮寝であることよ。

【現代語訳】前句 岩と岩の間の水面に映って見える月には、白い波しぶきがかかっている。強い風は露をも払い、雫がかかって夢もさめてしまう海辺の泊まりであることよ。

【考察】第三句は、くずし字では「破枕」と読めるが、句意にふさわしいのは「旅枕」であり、「旅枕」と句を改めた。

(初折 表 六) 露払ふ風に夢なき旅枕

六 床も定めぬ秋のかりふし

行助

【式目】秋 旅(かりふし) 「旅トアラバ、かりねかり枕」(連珠合璧集) 床(居所・体)

【作者】行助(応永十二年(二四〇五)～応仁三年(二四六九))。山名氏の家臣であり、出家後は延暦寺東塔の惣持坊に住み、法印権大僧都に至った。いわゆる連歌七賢の一人。『新撰菟玖波集』に三四句入集。

【語釈】●床もさだめぬ 眠る場所も定まらない。「山河のこほる夜ごとすみかへて床もさだめぬをしのひとりね」(洞院撰政家百首・冬・八七一・藤原隆祐)。「嘆きつつ床も定めぬうたたねはうたても夢の程もなきかな」(久安百首・恋・四七七・藤原季通)。●かりふし 仮の寝床に伏すこと。「寝られぬ床は野辺の仮ふし／旅枕夢さへとひやたえつらむ」(宗祇以前何船百韻・四／五)。「夢おどろかす秋のかりふし／おきまさる露ややどりにふけぬらむ」(心敬以前「ほととぎす」山河百韻・四／五)。「うかれつつところさだめぬ月の頃／君待つ宵の秋のかりふし」(心玉集・一二五八／一)

二五九)。

【付合】旅寝の様を付ける。「床も定めぬ」には恋の面影がある。

【一句立】寝る場所も定まらない、秋の旅の仮寝。

【現代語訳】(前句 露を払って風が吹き、おちかかると露の冷たさに夢見ることできない、旅の仮寝であることよ。) 寝る場所も定まらない、秋の旅の仮寝。

(初折 表 七) 床も定めぬ秋のかりふし

七 衣うつかたを里かと分る野に

一元説

【式目】秋(衣うつ) 旅(分る野)「旅トアラバ、く野を分衣」(連珠合璧集) 里(居所・体)

【作者】元説 『熊野千句』に参加。また『寛正四年六月廿三日唐何百韻』、『寛正六年正月十六日何人百韻』(野坂本)。大阪天満宮文庫本では「元轍」である。)にも出座。

【語釈】●衣うつかた 衣を打っているあたり。「里わかぬ秋のつきよみ名もしるく／すみわたりけり衣うつかた」(顕証院会千句第三百韻・七五／七六・宗砌／俊喬)。●分る野に わけて進んでいく野に。「分く」に見分ける、判別するの意味も掛けている。「もと立つ道を誰かおこさむ／分くる野にねぬる小萩の露も惜し」(吾妻辺云捨・二七一／二七二)。「旅トアラバ、草枕、…かりねかり枕、…野を分け衣」(連珠合璧集)。

【付合】仮寝をしている前句に、衣を打つ音が聞こえてきた方角を里かなとあたりをつけ進んだのだがと、その理由を付けて続ける。

【一句立】衣を打っている音が響いてくるそのあたりが里であろうかとあたりをつけて、分け進んでいく野原に。

【現代語訳】(前句 寝る場所も定まらないような、秋の旅の仮寝をすることよ。) 衣を打っている音が響いてくるそ

のあたりが里であろうかとあたりをつけて、分け進んで来た野原だが、(里までゆきつけず) 野辺に仮寝をしていることよ。

(初折 表 八) 衣うつかたを里かと分る野に

八 日も夕霧の空ぞ寒けき

宗祇

【式目】秋(霧)

【作者】宗祇(応永二十八年(一四二二)～文亀二年(一五〇二))。三十歳頃より連歌の道に入り、宗砌に師事した後、寛正年間には専順に師事した。この連歌も専順の弟子としての参加である。応仁の乱後、東国にて心敬に親炙し、強い影響を受け、『竹林抄』、『新撰菟玖波集』という大きな撰集に心敬の句を最も多く入れている。

【語釈】●日も夕霧 日も夕日となり、あたりに霧が立ちこめてきて。古今集五一五番歌の表現「日も夕暮れ」(夕暮れ時になって)が本来の形であったが、ここは「夕霧」につないだもの。和歌では「日も夕潮」「日も夕顔」といった言い方が詠まれているが、「夕霧」は管見に入らず、連歌も一例のみしか見つからない。「唐衣日も夕暮れになる時は返す返すぞ人は恋しき」(古今集・恋一・五一五・詠人しらず)。「都さへ日も夕霧やまよふらむ/所々の道の初霜」(那智箆(北野天満宮本)・五九七/五九八)。

●空ぞさむけき 空の様子が寒々しいことよ。「すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ほそきものなれ」(徒然草第十九段)。「風をいたみこほれる雲に影もりて月も雪げの空ぞさむけき」(嘉元百首・冬月・一八五四・冷泉為相)。「さやかなり霜と夕べの鐘の音/雪にやならむ空ぞ寒けき」(因幡千句第十百韻・八七/八八)。

【付合】「衣」の縁から「ひもゆふ(紐結ふ)」を出している。また、「衣うつ」夜寒のイメージから「寒けき」を使った。「衣打トアラバ、夜寒秋寒」(連珠合璧集)。

【一句立】夕霧がたちこめてきて、空は寒々しい様子を見せていることよ。

【現代語訳】（前句 衣を打っている音が響いてくるそのあたりが里であろうかとあたりをつけて、分け進んでいく野原には）、夕霧がたちこめてきて、空は寒々しい様子を見せていることよ。

（初折裏 一） 日も夕霧の空ぞ寒けき

九 時雨ふる冬の田面に鴈鳴きて 盛長

【式目】冬（冬） 「冬の始の心ナラバ、時雨」（連珠合璧集）。 雁（動物） 雁春二秋一（二座二句物） 時雨（降物）

時雨秋冬各一（二座二句物・新式今案）

【作者】盛長 安富氏。細川勝元の重臣。『熊野千句』の興行者。この百韻では初折裏第十四句（初折裏末尾）、名残折表第一句という重要な位置の句を詠んでいる。

【語釈】●冬の田面 冬の田の表面。「冬深き田面のかりの音にぞしる霜より後もかくて見よとは」（雪玉集・田残鴈・一六四九）。「鴈トアラバ、（初鴈 とぶ鴈 たのものかり 衣かりがね）：田」（連珠合璧集）。「人は千里に衣打つらむ／くれそむる田面を寒み鴈鳴きて」（染田天神法楽千句（文明期） 第三百韻脇・第三）。「かりがねは雪のうづまぬ夕べかな／冬の田面に日こそさしぬれ」（染田天神法楽千句（文明期） 第七百韻発句・脇）。「一、田に雁がねはよし。雁に田は好むべからず」（心敬法印庭訓）。

【付合】第四句目から秋の句が五句連続しているので、ここで冬に変化させた。

【一句立】時雨が降っている冬の田には鴈が鳴いていて。

【現代語訳】（前句 夕霧がたちこめてきて、空は寒々しい様子を見せていることよ。）時雨が降っている冬の田には鴈が鳴いていて。

(初折 裏 二) 時雨ふる冬の田面に鴈鳴きて

一〇 嶺よりつゞく岡のかよひぢ 常安

【式目】恋(かよひぢ) 嶺・岡(山類・体)

【作者】常安 大館氏。『細川持之十三回忌品経和歌』、『細川満元三十三回忌品経和歌』に参加。『熊野千句』、『寛正四年三月廿七日何船百韻』、『寛正四年六月廿三日唐何百韻』に参加。

【語釈】●嶺より続く「我が宿は立田の麓しぐれして嶺よりつづく庭の紅葉ば」(隣女集・庭紅葉・二一六三)。●岡のかよひぢ「よひよひに篠わくる袖は露落ちて誰かしのびの岡のかよひぢ」(宝治百首・岡篠・三四四一・藤原基家)。「霞み行く入日に雪の跡見へて／通路しるき岡の辺の春」(熊野千句第二百韻・二七／二八・宗祇／行助)。

【付合】「田」に「岡」を付け、岡にある田の情景とした。「田トアラバ、：岡」(連珠合璧集)。また、「岡のかよひぢ」は、源氏物語、明石巻で、光源氏が明石の上の家に通うイメージを彷彿とさせることから、恋の印象のある語であろう。「岡辺の宿、この言葉明石に付くべし。この岡辺の宿は入道の娘をすませし所也。むまにてもかよる給ふ。」(光源氏一部連歌寄合之事)。

【一句立】嶺から続いている、岡を通って通う道。

【現代語訳】(前句 時雨が降っている冬の田のあたりには鴈が鳴いていて。) 田のそばには嶺から岡を通って通う道が続いている。

(初折 裏 三) 嶺よりつゞく岡のかよひぢ

一 うちしげり風も音せぬ真葛原 宗怡

【式目】 秋(真葛原) 恋(音せぬ)

【作者】 宗怡。名前の二文字目は、原本でわずかに部首の一部が見え、それにより「怡」と推定している。また句上の句数からも宗怡があてはまる。宗怡は、寛正から文明にかけての連歌に出詠している連歌師。『熊野千句』に参加。

【語釈】 ●うちしげり 繁茂して。「明石の浦は」緑の松の年深くて、浜風になびきなれたる枝に、手向草うち繁りつ、村々並み立てり(道ゆきぶり)。「ことしなき名となれるあはれさ／いろいろの秋の草みなうち茂り」(基佐集(斑山文庫本)・夏・二五七／二五八)。「風の音もならのはかしはうち茂り行過がてに涼しかりけり」(権大納言言継卿集・納涼・四七〇)。
●風も音せぬ 風も音をたてない。「鐘もたえ風も音せぬ夕暮れの心に宿を借る心かな」(草根集・夕幽思・一〇四七二・長祿二年(一四五八)七月十七日詠)。「とく咲きて散る日の遅き花もがな／風も音せぬ春雨のくれ」(宝徳四年千句第七百韻・発句／脇・金阿／梁心)。
●真葛原 葛の生えている原。「我が恋は松を時雨のそめかねてまくずが原に風騒ぐなり」(新古今集・恋一・一〇三〇・慈円)。葛は、蔓を広範囲に伸ばして繁茂する蔓草であり、その葉は秋風に吹かれ、白い裏を見せて裏返る。「我が片岡のまつとだに聞け／人しれぬうらみにしげる真葛原」(表佐千句第七百韻・七八／七九・甚昭／宗祇)。「むねあくばかりいつかうらみむ／しげりけり野となる里の真葛原」(親当句集(赤木文庫本)・二七九／二八〇)。

【付合】 前句の「岡」「嶺」から「葛」を出した。「くずトアラバ、まくず くず花 くすかつら ……岡…嶺 秋風」(連珠合璧集)。嶺から岡に続いている道は、その周辺に目を転ずれば繁茂した葛の草原となつていと付けれる。葛は秋に裏葉を見せることで、恋人に飽きられ、恨む風情の表現となるが、ここでは、道も見えなくなるほど繁る葛に、恋人が通つてこない恋の悲しみを含ませてもいるか。「秋風のふきしくをのまくず原うらむる外のことのはもなし」(隣女集・寄

葛恋・二三七五。「真葛原夏野の草はしげれども君が御代にはみちぞおほかる」（秋風和歌集・賀・六六八・大納言たかちか）。

【一句立】一面に繁茂して、風の音もしない、葛の野原。

【現代語訳】（前句 嶺から岡を通って通う道が続いている。）あたり一面、生い茂った葛の野原で、風の音もしないことだ。

【考察】虫損箇所を推定し、一句を作成した。

（初折 裏 四） うちしげり風も音せぬ真葛原

一二 小松が末ぞ草にまじれる 頼宣

【式目】雑 草与草（可隔五句物）

【作者】頼宣 明智氏。「明智兵庫頼宣」（諸家月並連歌抄）。『寛正四年三月廿七日何船百韻』、『寛正四年六月廿三日唐何百韻』『熊野千句』に参加。

【語釈】●小松が末 小さな松の先端。「巻向の檜原もいまだ雲るねば小松が末ゆ沫雪流る」（万葉集・冬雑歌・二三一四、古今和歌六帖七五四に赤人歌として、夫木抄一三九三三に家持歌として入集）。「後見むと君がむすべる岩代の小松がうれをまた見つるかも」（玉葉集・雑五・二四三六・柿本人麿、万葉一四六歌を再録）。「花の散る比良の嶺おろし激しくて／小松がうれも匂ふ春風」（寛正三年二月二十五日専順独吟何路百韻・三五／三六）。●草にまじれる 草の中から先端が見えている様。松の先が草から見える様は、次にあげた定家歌からも、夏の趣も感じられるか。「夏山の草葉のたけぞ知られぬる春見し小松人しひかずは」（六百番歌合・夏草・二〇一・藤原定家）。「里ありて一人ふりぬる野は広し／千草にまじる菊のひとつと」（園塵第四・秋・五五九／五六〇）。

【付合】葛が一面に生い茂り、風の音もしない野原、その茂った草の中から、松の先が見えていと付けた。また草と草とは可隔五句物であり、この法則にのっとり、第十八句に「むら草」が詠まれている。

【一句立】小さな松の先が草にまじって顔を出している。

【現代語訳】（前句 葛が一面に生い茂り、風の音もしない野原。）そんな野原の盛んな草の中からは、小さな松の先が草にまじって顔を出している。

『撫子の「百韻」調査記録及び翻刻

『撫子の「百韻」調査記録

【調査日時】 平成二十四年七月二十日（金） 午前十時半～午後五時半

平成二十四年八月三十一日（金） 午前十時半～午後四時半

【調査場所】 早稲田大学中央図書館特別資料室

【調査者】 伊藤伸江・奥田勲

【調査書誌】

本調査の対象である『撫子の「百韻」』は、早稲田大学中央図書館伊地知鐵男文庫蔵『集連』に収められている。『集連』は、請求記号「文庫20 00038」、袋綴写本（横本）、一冊。書誌は『伊地知鐵男文庫目録』に収載百韻の細目も含め詳しく、また早稲田大学資料影印叢書第三十五卷『連歌集（一）』にもあり、早稲田大学中央図書館のホームページにも記載がある。かつ『集連』全巻の影印が早稲田大学資料影印叢書第三十五卷『連歌集（一）』に収録されており、インターネット上でも、画像が、早稲田大学中央図書館のホームページに公開されている。

それゆえ、詳細はそれらに譲りたいが、今回調査した本は、想定される原本の表紙見返し部分から裏表紙見返しまでの全般に補修を施し、新たに表紙を加え製本し直した本である（原表紙のみは別保存）。非常に薄い紙に端を断ち落とした原紙を貼り、真ん中で折って補修製本した形である。見返しに、原装に存したと思われる極めを貼付けている。原本に用いられている原紙は薄褐色、黄土色の二種類の楮紙。また、裏表紙見返しに、後筆で「明治十四年十二月十二日（花押）」の識語があり、現在の形に修補・装丁した日付かと想像されるが、花押については詳細不明である。

『撫子の「百韻」』は、『集連』所収百韻中末尾に位置するもので、一八三丁裏から一八七丁裏までに書かれている。一丁の表、裏に各十二行書。虫損が入り、欠字及び判読しがたい部分が若干存する。なお、この百韻各丁の末尾中央に、丁付の漢数字が入っているのがぞいでいる。これは直前の『寛永十四年三月十六日百韻』からの九丁に順に一から九の丁付が入っているものである。補修の際にひとまとめになっている資料の覚えとして記したものであるうか。なお、『集連』のほかの部分には、そのような丁付は見えない。

注1 『伊地知鐵男文庫目録』（平成四年三月・早稲田大学図書館編集・発行）

2 早稲田大学資料影印叢書第三十五卷『連歌集（二）』（平成四年十二月・早稲田大学出版部）

伊地知鐵男氏書写『連集』調査記録

【調査日時】平成二十四年八月三十一日（金）午前十時半～午後四時半

【調査場所】早稲田大学中央図書館特別資料室

【調査者】伊藤伸江・奥田勲

【調査書誌】

伊地知鐵男文庫には、昭和十年に伊地知氏が写した九つの百韻の綴られた書『連集』（請求記号「文庫2000021」）があり、その中に「伊藤松宇氏蔵本の写し」と記された初何百韻がある。今回、『連集』を閲覧調査したところ、この初何百韻は、内容と数多くある虫損箇所が完全に一致し、『集連』に収められた『撫子の「百韻」』を、伊地氏が書写したものと判断される。

『連集』は、縦二十四、二cm、横十六、八cmの袋綴写本。表紙は茶（楮紙）で、表紙左上方に朱の直書きにて「連集宗祇中心」と記載がある。書誌は、『伊地知鐵男文庫目録』に収載百韻の細目を含め述べられており、早稲田大学中央

図書館のホームページにも記載がある（ただし、画像は現在のところない。）収載百韻は九種類で、七賢時代の百韻から宗祇の参加した文明期の百韻までを、七海氏蔵本、京大久原文庫本、平松文庫蔵本、石田元季氏本などにより伊地知氏が書写している。これら百韻のうち「松や知る花いくかへり宿の菊」百韻、川越千句第四百韻には昭和十年五月二十七日、同五月二十五日の書写年月日が記されており、「春草は卯の花かきのそとも哉」百韻には、「昭和十年八月一日校了」の記載がある。それゆえ、『集連』は、伊地知氏が、おそらく昭和十年に自ら書写した百韻のうち、宗祇関係の時期の百韻と考えたものを一冊にまとめ作成したノートと考えられる。初何百韻自体には書写時期の記載はなく、末尾に伊地知氏による朱書きで、「伊藤松宇氏所蔵本ニ依ル」と書かれているのみである。

『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）解説（山根清隆氏）は、「所在不明の諸本」の項において「撫子の」百韻に関して、「舊伊藤松宇氏蔵本」と触れている。『連集』の存在によって、「撫子の」百韻は、おそらく昭和十年の時点で伊藤松宇文庫蔵であったことがわかる。その後、何時か不明であるが、松宇の手を離れ、やはり何時か不明だが（昭和四七年以降の可能性もある）、伊地知鐵男氏の蔵となったと思われる。

なお、伊藤松宇は、安政六年（一八五九）生まれで、明治十五年（一八八二）に長野から上京、昭和二十三（一九四三）まで生きた。彼の号は、明治八年から一五年が琴聲、一五年から松宇である。これらことから、「撫子の」百韻の入っていた『集連』裏表紙見返しの「明治十四年十二月十二日（花押）」の識語（後筆）は、現在の形に補修した際の識語であろうが、松宇のものではないと思われる。

注1 『松宇家集』（一九二六・友田泰信堂）所載「松宇年譜」による。

「撫子の」百韻 翻刻

初何

- | | | |
|----|------------------|----|
| 1 | 撫子の花の兄かも梅雨 | 勝元 |
| 2 | 枝をつらぬる木々の夏かけ | 専順 |
| 3 | 山深み涼しき水に鳥おりて | 心敬 |
| 4 | 岩まの月にかゝるしら波 | 実中 |
| 5 | 露はらふ風に夢なき旅枕 | 通賢 |
| 6 | 床もさためぬ秋のかりふし | 行助 |
| 7 | 衣うつかたを里かと分る野に | 元説 |
| 8 | 日も夕霧の空ぞ寒けき | 宗祇 |
| 9 | 時雨ふる冬の田面に鴈鳴て | 盛長 |
| 10 | 嶺よりつゝく岡のかよひち | 常安 |
| 11 | 打しけり風も音せぬ真葛原 | 宗怡 |
| 12 | 小松か末ぞ草にまされる | 頼宣 |
| 13 | つれなくてなひく色をもみえぬ世に | 順 |
| 14 | むなしき暮を誰にうらみん | 心 |
| 15 | 憂心我となくさむかたもなし | 宗 |
| 16 | 秋より外の里をしらはや | 賢 |
| 17 | 詠侘ぬふりにしまゝの宿の月 | 祇 |

- 18 露もひかたき庭の村草
 19 柴はこふ山下道のかきくもり
 20 夕をいそぐ松そ木高き
 21 照す日のかけのみいとふ夏たけて
 22 すくなき水を□小田にせく声
 23 人そ行湊は塩やかれぬらん
 24 舟のあらはにあしそよく音
 25 心にはさはる事なき世を捨て
 26 すまればすまんかりの山里
 27 かこはしな風にかたふく柴の門
 28 袖にそうつる明かたの月
 29 色おしむ秋のはなたの薄衣
 30 帯たる露の野にむすふ比
 31 真萩原いつくあれとも朝にて
 32 夕そつらき花のうつろふ
 33 あすまてを春の日かすと思は、や
 34 過かこし□たはかすむ老か身
 35 □郷むは□路もかよはす成にけり
 36 いかなる夢をおもかけにせん
 37 恨侘ぬるもねられぬさよ更ッて
- 行 光長 実 説 長 心 順 安 祇 長 行 順 心 実 宗 頼 心 □ 祇 説

┌

┌

- 38 なみたやくもる残るともし火
 39 降ぬまも心に聞は雨の音
 40 すめる太山そ瀧のもとなる
 41 石はしる水は軒はに遠からて
 42 苔の雫の落る薨屋
 43 生いてぬ朽葉か下の松の種
 44 おもへは千代の末そ久しき
 45 思ひこしはしめもしらぬ秋の月
 46 夜もあかつき□よりは冷し
 47 山かけの垣□に鹿や来鳴たつ
 48 小野てふ里そ谷をかけたる
 49 冬こもるけしきもしるく木をきりて
 50 麻のたもとの雪はらふみゆ
 51 ^三をく露はこほりて落る小篠原
 52 たまさかにたにいつかとけまし
 53 うくつらくたくひはあらし人心
 54 われのみはては物おもへとや
 55 あはれより酬しらるゝ恋の道
 56 鷹すゑいたす今日の春山
 57 折かへるさくらか枝はひとつにて

宗 安 賢 行 順 祇 心 実 長 祇 宗 宗 心 賢 順 説 安 頼 行 宗

「

58 □□□□ さく花そ間近き
 59 真木の戸□□残れる月のさしむかひ
 60 外面の野へにうつる秋の日
 61 遥なる沢の流に霧晴て
 62 入江の波におつる山風
 63 千鳥鳴夕の雪に泊舟
 64 都の友よわれをわするな
 65 ^ウ春秋に独なくさむ身を捨て
 66 草の庵りもすめるかひあり
 67 猿さけふ声も涙の夜の雨
 68 ね覚の空のくらすおく山
 69 ありあけの残れる月に時雨して
 70 みせはやしほるかへるさの袖
 71 いかさまに又とふまては堪てまし
 72 しらぬいのちをたのむ行末
 73 世中□^はさためのなきを便りにて
 74 た、あらましにすこす年月
 75 古寺に誰みなれ木の嶺の松
 76 ふもとの杉にかよふ秋風
 77 露分て三輪の市ちに行かへり

□ □
 行 順 心 賢 宗 心 順 行
 祇 順 心 賢 宗 心 順 行
 祇 順 心 賢 宗 心 順 行
 賢 祇 心 宗 実 説 行 長 宗 頼 祇 順 心 賢 宗 心 順 行

┌

┌

- 78 霧もふる野の里やたつねん
 79 名 かりあくる田つらの庵は人すまて
 80 月ばかりこそ軒にもりくれ
 81 さゆるよの雪の玉水声もなし
 82 しつかにねむる埋火の本
 83 年たけて春の心もおもほえず
 84 なく鶯そおりもたかへぬ
 85 朝ことに風にまたれし梅咲て
 86 散とき花をよそにやはせん
 87 つらしとて思ふ人をはへたてめや
 88 又こそやらめかへす玉札
 89 中立の心もしらす頼みきて
 90 いふことのはの末ははつかし
 91 あらまはした、偽の山のおく
 92 捨ぬうき身も御法をそきく
 93 ッ おろかなる人を佛のあはれみて
 94 神のたすけを猶や憑まん
 95 □ うくる恵の末の広き代に
 96 おほ野の露そ草にあまれる
 97 秋の霜あたる花と又きえて

行 長 宗 心 順 行 長 頼 順 安 祇 説 実 賢 宗 祇 長 順 安 説

┌

┌

98 いろいろすくなる松虫の声

99 風寒みくもれる月の更る夜に

100 都のやとの鐘そしつけき

勝元十二 元説七 光長一

専順十一 宗祇十

心敬十三 盛長八

実中六 常安六

通賢七 頼宣六

行助十一 宗怡二

心 宗 行

【備考】

各句に番号を付し、翻刻した。判読し難い文字は□とし、推定される字がある時には右脇に括弧付きで示している。78句は「ね」右傍に「ら」と傍書。